

# 「17年目の秘密」

第2話 「家族との確執」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

谷島

春樹 (17)  
夏希 (20)

中央高校全日制二年生

姉、派遣OL

高崎

倫子 (17)

専業主婦

山岸

利枝子 (17)  
友子 (45)

中央高校全日制二年生

母、スナックのママ

あやめ (15)

妹、中学三年生

宮田

真由子 (17)  
真実 (0)

未婚の母

娘、赤ん坊

藤原

宣彦 (48)  
佐和 (46)

中央高校全日制二年生

父、会計事務所所長

深雪 (15)

妹、中学三年生

川村

浩輔 (17)

中央高校定時制二年生

牧

和哉 (17)  
淑子 (45)

滝雀学園高校二年生

母、不動産会社副社長

同級生

亜沙美 (17)  
剛士 (17)

中央高校全日制二年生

中央高校全日制二年生

奈々 (17)

中央高校全日制二年生

寺 <small>てら</small>	〃	〃	同級生
沢 <small>さわ</small>			
隆 <small>りゅう</small>	裕 <small>ゆう</small>	香 <small>か</small>	紗耶香 <small>さやか</small>
三 <small>ぞう</small>	梨 <small>り</small>	澄 <small>すみ</small>	香 <small>か</small>
(47)	(17)	(17)	(17)
喫茶店店長	滝雀学園高校二年生	滝雀学園高校二年生	滝雀学園高校二年生

1 アパート・谷島家・居間（夜）

春樹が、しょんぼりと座り込んで、夏希の帰りを待っている。

と、夏希が帰ってくる。

夏希「ただいま」

春樹「……」

夏希「明日も学校でしょ。早く寝ないと、遅刻しても知らないよ」

春樹「……」

夏希「ハル……？」

春樹「今日も、会社で残業？」

夏希「うん、そうだよ」

春樹「へえ。社員証がなくても、会社入れるんだ」

夏希「……」

春樹「（ジロリと夏希を見て）二ヶ月間も、上手く騙してくれたね」

夏希「……」

春樹「（突然怒鳴って）何が仕事だよッ。朝帰りの日もあって、遅くまで仕事してるの

も生活のためだと思って、姉ちゃんに感謝してたのに……。それなのに、そんな俺の気持ち踏みにじるようなこととして……。この二ヶ月、ずっと何してたの？ どうして会社辞めたの？ 二ヶ月の間、生活費とかどうしてたの？」

夏希「……」

春樹「姉ちゃんッ」

夏希「……いつか、こうなるときが来るんじゃないかって思ってた……」

春樹「……」

夏希「上司がね、私たちの気持ちも知らずに偉そうなこと言って、それに頭にきて、こっちから辞めてやったの。今は、キャバクラで働いてる。そっちのほうで、稼ぎも良いし、ずっと楽できるからね」

春樹、夏希を睨めつけ、頬を叩く。

夏希「何すんの！」

春樹「キャバクラで働いてるなんて、よくそんなことできたね……。キャバクラ嬢を姉

に持つ俺の気持ちが分かる？　これまで  
も、親無しで養護施設で育ったことに負い  
目感じてたのに、これで姉ちゃんがキャバ  
クラで働いてることが周りにバレたら、俺  
は笑いものだよ」

夏希「キャバクラで働くことの何がいけない  
のッ？　派遣の時よりよっぽど稼ぎ良い  
し、前よりもずっと贅沢できるんだよ。何  
が不満なの？」

春樹「身体張った水商売なんかで食べさせて  
もらっても、何も嬉しくない。すぐに辞め  
て、新しい仕事先見つけてよ。俺のバイト  
だけじゃ、とても暮らしてはいけないんだ  
から。良いね！」

夏希「……」

怖い顔で夏希を見ている春樹。

## 2 スナック “友子” ・店内

利枝子の家で、一階が店、一階の奥と  
二階が母屋といった造りになっている。

カウンター席が横に続き、テーブル席が数席ある。

利枝子の母・友子（45）が、テーブル席の客と一緒に酒を飲んだりして、接客をしている。

客A「今日のパママも、飲みっぷりが良いね」  
友子「当たり前じゃありませんか。良い飲みっぷりを見せるのが、私のサービス精神ですから（と笑う）」

カウンター席の客たちが、友子の後ろ姿に向かって、

客B「ママ、つまみないよ」

客C「ママ、こっちも」

友子「（振り返ると）あら、ごめんなさい。すぐに用意しますから」

と、立ち上がり、支度をする。

友子「（母屋に向かって）利枝子、利枝子ッ（と怒鳴る）」

### 3 山岸家・利枝子の部屋

利枝子が、ベッドにうつ伏せになって  
携帯電話を見ている。

友子の声が聞こえる。

友子の声「利枝子、ちょっと来て手伝って。

利枝子ッ」

うんざりした顔の利枝子。

#### 4 同・二階の廊下

利枝子が部屋から出てくる――隣の部  
屋をノックする。

利枝子「あやめ。起きてるんでしょ。ちよつ  
と出てきて」

と、利枝子の妹・あやめ（15）が出  
きて、

あやめ「何？」

利枝子「母さんが呼んでる。店、手伝ってき  
て」

あやめ「でも、お母さんは姉ちゃん呼んでた  
じゃん。私には関係ないもん」

利枝子「（イライラしながら）行ってきてよ。

どっちが行こうが変わらないでしょ」

あやめ「だったら姉ちゃんが行けば良いこと  
でしょ。私だって暇じゃないんだから」

と、ドアを閉めてしまう。

利枝子「ちよっと、あやめッ」

と、渋々階段を降りていく。

5 スナック “友子” ・店内

友子の手伝いをしている利枝子。

友子「（つまみの入った皿を出し）これ、テ  
ーブルのお客様にお出しして」

利枝子、黙ったまま皿を受け取ると、

客Aのところまで持っていく。

利枝子「（無表情で）お待たせしました」

客A「おお、ありがとう」

と、さりげなく利枝子のお尻に触れる。

利枝子、カチンときたように、テーブ  
ルに置いてあるコップの水を、客Aに  
かける。

友子「利枝子ッ」

客 A 「(利枝子に) 何するんだよッ」

利枝子 「それはこっちのセリフ。未成年の体に触るからこういう目に遭うの。自業自得よ。わいせつ罪で警察に突き出しても良いんだよ」

友子、利枝子の元まで来ると、

友子 「(客 A に) 申し訳ございません。クリーニング代弁償させていただきますから」

客 A 「良いよ良いよ。今日は帰るから」

と、現金をテーブルに置くと、不機嫌そうに帰っていく。

友子 「申し訳ございませんでした」

利枝子 「(友子に) 謝ることなんてないよッ。

私の体触るあいつが悪いんだから」

友子 「(他の客たちにも) どうも、お騒がせしまして」

利枝子、不機嫌そうにと母屋に戻っていく——うんざりした顔の友子。

生徒たちが昼食を食べている。

亮、亜沙美、剛士、奈々は楽しく談笑しているが、春樹と利枝子は、手が止まって、深刻そうな顔をしている。

春樹、夏希の声を思い出す。

夏希の声「キャバクラで働くことの何がいけないのッ？ 派遣の時よりよっぽど稼ぎ良いし、前よりもずっと贅沢できるんだよ。何が不満なの？」

利枝子、友子の声を思い出す。

友子の声「利枝子、ちよつと来て手伝って。

利枝子ッ」

同時にため息をつく春樹と利枝子。

亮「なあ、二人とも、喧嘩したのか？ 今日、全然口きいてないから」

お互いの顔を見る春樹と利枝子。

春樹「（亮に）してないよ、喧嘩なんて」

利枝子「私だって」

亜沙美「じゃあ、どうしたの？」

春樹「ちよつとね……」

利枝子「私も」

剛士「なんだよ、気になるじゃん」

奈々「家族と喧嘩したとか」

春樹「（苦笑して）まあね」

利枝子「へえ、珍しいね」

春樹「そういう利枝子なんて、しょっちゅう

お母さんと喧嘩してるんだもん、今更落ち

込むことなんてないでしょ」

亮「けど、二人ともそんなに落ち込んでる様

子じゃ、普段しないような喧嘩だったんじ

やないか？」

春樹「まあ、あまり詳しくは言えないけど、

ここまで姉ちゃんに裏切られるなんて思

わなかった」

亮「……？」

剛士「……？」

利枝子「私も、今回ほど腹立ったことはない

よ。昨日は、本当にイライラしたんだから」

亜沙美「……？」

奈々「……？」

亮「二人とも、何テンション下がるようなこと  
と言ってるんだよ」

春樹「……」

利枝子「……」

亮「辛いときこそ、心を落ち着かせろよ。そ  
したら、嫌なことなんてどうでも良くなる  
し、壁をぶち壊すことだって夢じゃないぞ」  
と、笑っている亮。

春樹「亮君だって、家族と喧嘩することある  
んじゃないの？」

亮「え？ まあ、そりゃ無いとは言えないけ  
どさ」

利枝子「生まれてくる家、間違えたんじゃない  
いかって思うよ、私なんか」

春樹「俺も」

亮「……俺だって、正直そう思うときもある。  
けど、だからってそれはもうどうしようも  
ないことだろ。だから、潔さを持つことも  
大事なんじゃないかな」

春樹「潔さねえ……」

利枝子「……」

まだ元気がない様子の春樹と利枝子。

タイトル

『第2話 家族との確執』

7 宮田家・リビング（夕方）

郊外の閑静な住宅地にある洋風建築の

一軒家。

ベビーベッドで寝ている真実の顔を、

幸せそうに見つめている真由子。

と、インターホンが鳴る。

真由子「（インターホンに向かって）はい？」

と、倫子の声がする。

倫子の声「真由子。私、倫子」

真由子「すぐ開けるね」

と、出ていく。

8 同・玄関

マスクをした倫子が、紙袋を持って立

っている。

真由子が出てくる。

真由子「どうしたの？」

倫子「真実ちゃんの顔見ようかなと思って」

真由子「ごめん。今、眠ってるの」

倫子「そっか、じゃあ入らないほうが良いね。

これさえ渡せば良いから」

と、紙袋を渡す。

真由子「何、これ？」

倫子「ちよつとおかず作ったの。真由子だつて、お父さんとの暮らしだけだと、家事もやらなきゃいけないくて大変だと思つたらね」

真由子「ありがとう、助かる。真実が産まれてから、いろいろバタバタだったの。ご飯作るのも、結構手抜きしてたんだ」

倫子「良かった、喜んでもらえて」

真由子「喜ぶに決まってるじゃん」

と、原付バイクのエンジン音が聞こえる。

振り返る倫子。

原付バイクが止まり、男がヘルメットをはずす——浩輔である。

倫子「浩輔ッ」

真由子「（浩輔を見て）どうしたの？」

浩輔、倫子たちのところまでやってくる、と、

浩輔「これから学校なんだけどさ、どうしても真由子のところに寄って、持ってきたいものがあった。（と袋を出して）これ、シユークリーム。子育て頑張ってる真由子に差し入れ」

真由子「ありがとう。倫子も浩輔も、本当に助かる」

浩輔「（倫子に）倫子も何か持ってきたの？ていうか、風邪でも引いたの？」

倫子「多分花粉症かな。くしゃみ止まらないの。（と苦笑すると）私はね、適当におかず作って、タッパーに入れて持ってきたの」

浩輔「さすがは倫子だ。定時制の高校生と、

専業主婦とでは、持ってくるものが違うね」

真由子「そんなことないよ。気持ちが嬉しいんだから」

浩輔「ありがとう。じゃあ、俺行くわ。早く行かないと、遅刻するから」

倫子「そっか」

真由子「ありがとね」

浩輔「うん。それじゃあ」

と、ヘルメットをかぶり、バイクに乗ると、去っていく。

真由子「浩輔も、仕事しながら学校に通ってるなんて、大変だね」

倫子「けど、勉強しながら働くなんて、関心するけどね」

真由子「それが浩輔の良いところなんだよ。何事にも頑張れるところが」

倫子「そうだね」

と、リビングから真実の泣き声が聞こえる。

真由子「真実起きちゃった。ごめん、おかず

ありがとね。またタツパー洗って返すから」

倫子「急がなくて良いからね」

真由子「うん。じゃあね」

と、ドアを閉める。

残された倫子。

倫子「(呟くように) みんな、生き生きとし

てるんだ……」

と、マスクを取る——倫子の口元には、  
殴られた跡がある。

## 9 牧家・居間

和哉が学校から帰宅する。

和哉「ただいま」

淑子がイライラしながら電話をしてい  
る。

淑子「(携帯に) どうしてそういうことにな  
るのよ。入札の件は、全てあなたに任せ  
たって言ったわよね。良いわよ、今更弁解な  
んて聞きたくないから。すぐそっち行くか  
ら」

と、電話を切る。

和哉「……」

淑子、和哉に気づくと、

淑子「あら、帰ってたの」

和哉「ちゃんと、『ただいま』って言ったん

だけど」

淑子「ごめん、電話で気がつかなかったわ」

和哉「これから出かけるの？」

淑子「そうよ。悪いんだけど、今日も晩ご飯、

コンビニかスーパーで適当に買って。ごめ

んね」

と、鞆を持って、そそくさと出て行く。

和哉「(呟くように) どうせ悪いと思ってな

いくせに」

と、ブツブツ文句を言いながら出てい

き、階段を上っていく。

## 10 公園

春樹と利枝子が話している。

利枝子「どうしたの？ 私に話して？」

春樹「利枝子の家って、スナックやってるでしよ」

利枝子「うん」

春樹「身内の人が、水商売してるのはどうなのかなって……」

利枝子「どうって……？」

春樹「水商売をしてることを、どう思ってるのかなって……。嫌なのか、辞めてもらいたいとか……」

利枝子「ああ、そういうことか……。まあ、私のところは店がないと、家族三人食べていけないからね。あの店は父さんが母さんと始めた小料理屋を、父さんが交通事故で亡くなってから、スナックに直した店だから、どつちにせよお酒が無いと商売できないから、何とも思っていないけど」

春樹「辞めてほしいとかは、思わない？」

利枝子「うーん……。唯一言えることは、私や妹を、当てにしないでほしいことかな。よく手伝わされたりするからさ」

春樹「そうだったね」

利枝子「急に、どうしてそんな質問するの？」

春樹「いや……ちよつと気になることがあつ

て……」

利枝子「何？」

春樹「言えないよ。とても、人様に言えるよ

うなことじゃないから……」

利枝子「そつか。でもやつぱり、世間一般か

ら見れば、水商売への印象は悪いよね。ス

ナックだったり、キャバラだったり、結

局女を武器に客の接待して、お金儲けする

んだもんね」

春樹「うん……」

利枝子「実は、私も春樹に聞きたいことがあ

るの」

春樹「何？」

利枝子「家族のこと、どう思う？」

春樹「家族のことかあ……」

利枝子「親のこととか、兄弟姉妹のこととか

さ」

春樹「そうだなあ……。親兄弟関係なく、嘘はついてほしくないかな。友達も一緒だけど、結局嘘をつくってというのは、その人を裏切ることでしょ」

利枝子「そうだね……。」

春樹「それに、どんなことがあっても、親は子どもを捨ててはいけないって思う。家族がいないと、生きていけないでしょ。家族がいるから、自分という人間が生きてられるんだもん。まあ、だからと言って、俺を捨てたような親に、今更会いたいとは思わないけどね（と苦笑する）」

利枝子「……。」

春樹「けど、利枝子には親を大事にしてほしい。お父さんが亡くなってるなら、尚更お母さんのことを。店を手伝わされたりすることもあるけど、それはきつと、利枝子のことを頼りにしてるからだと思う。当てにされてるうちがハナだと思わなきゃ」

難しい顔の利枝子。

11 アパート・谷島家・玄関

春樹が帰宅する。

出かけようとしている夏希と鉢合わせになる。

春樹と夏希、お互い目が合う。

夏希、春樹に何かを言いかけるが、そそくさと中に入っていく春樹。

やりきれないような顔で出ていく夏希。

12 同・同・居間

鞆を置く春樹——恨めしそうに、玄関の方を見る。

13 山岸家・利枝子の部屋（夜）

宿題をしている利枝子。

友子の高らかな笑い声が、店のほうから聞こえてくる。

落ち着かない様子の利枝子。

利枝子「うるさいなッ」

と、本をドアに向かって投げつける。

14 同・あやめの部屋

勉強しているあやめ、物音に驚き、立ち上がって振り返る。

あやめ「お姉ちゃん……？」

15 同・利枝子の部屋

利枝子、布団にこもり、不貞寝している。

と、ドアが開き、あやめが顔をのぞく。

あやめ「お姉ちゃん……？」

利枝子「(あやめを睨んで)何？」

あやめ「(怯えるように)いや……物音がしたから」

利枝子「(冷たく)何もない。とつとと出てって」

と、再び布団をかぶってしまふ。

あやめ「ごめん……」

と、静かにドアを閉める。

16 喫茶店 “エテ・プランタン” ・店内

春樹と寺沢が話している。

寺沢 「シフトを増やしてほしい？」

春樹 「はい。土日以外でも、平日の夕方から

夜なら、学校から直で来ますから」

寺沢 「……」

春樹 「店長」

寺沢 「いや、春樹君の気持ちはありがたいよ。

けど、春樹君だって学校があるんだ。学校

終わってから、バイトというのも酷だと思

うんだけどねえ……」

春樹 「……」

寺沢 「テスト勉強だって、部活動だってある

だろ。そんな状態でバイトしたって、余計

に春樹君が疲れるだけだ。無理したい気持ち

ちもわかるけど、無理して、春樹君の身に

もしものことがあったら、雇い主としての

私の責任にもなってしまおう」

春樹 「……」

寺沢「少しずつ頑張れば良いんだよ。時間は

まだたくさんあるんだから」

返す言葉もなく黙っている春樹。

17 アパート・谷島家・居間

春樹が帰宅し、電気を点ける。

誰もいないガランとした部屋を見回す。

18 同場所（回想）

春樹が勉強をしている。

夏希、作ったカレーライスを盛り付けると、

夏希「ハル、できたよ」

春樹「うん」

夏希「食べるよ」

春樹「はい」

と、小さなテーブルにカレーの皿を置く夏希。

夏希「よし、食べよう。いただきます」

春樹「いただきます」

と、カレーを食べ始める。

春樹「うん、美味しいッ。やっぱ姉ちゃんの  
カレーが一番だわ。ずっと食べてられる」  
夏希「じゃあ、冷凍保存でもしとこうか？」  
春樹「良いよ。そうすれば、好きな時に食べ  
れるもんね」

夏希「食いしん坊なんだから」

笑い合う春樹と夏希。

#### 19 同場所（回想戻り）

春樹が、体操座りをして、壁にもたれ  
かかっている——魂が抜けたように、  
無表情な顔をしている。

#### 20 滝雀学園高校・全景

#### 21 同・昇降口

和哉が下校しようと、スリッパを靴に  
履き替える。  
と、聡実もやってくる。

聡実「和哉君、今日、真由子のところ行く？」

和哉「あ、良いよ」

聡実「良かった」

と、靴を履こうとする聡実――足を靴に入れようとすると、足に激痛が走る。

聡実「痛ッ」

いぶかしそうに、聡実を見る和哉。

慌てて靴を脱ぐ聡実。

靴下に血が滲んでいる。

和哉「聡実ッ、どうしたッ」

と、駆け寄り、慌てて聡実の靴を見る。

靴から、大量の画鋲が出てくる。

驚いたような顔の和哉。

と、クラスメイトの紗耶香（17）がやってくる。

紗耶香「どうしたの？」

和哉「聡実が怪我したんだ。保健室連れてく

から、紗耶香、俺と聡実の荷物、保健室に

持ってってくれ」

紗耶香「わかった」

和哉「（聡実に）大丈夫か？」

聡実「うん……」

と、和哉の肩につかまりながら、ゆっくりと保健室に向かう。

## 22 同・保健室

養護教諭が、聡実の足の処置をしている——側にいる和哉と紗耶香。

養護教諭「どうしたの？」

和哉「それなんですけど……」

聡実「（慌てて遮って）下に落ちてた画鋏に気がつかなくて、ふんじやったんです」

和哉「……」

紗耶香「……」

養護教諭「気をつけなさいよ」

聡実「はい……」

和哉「聡実……」

聡実「ごめんね、和哉君や紗耶香にも迷惑か  
けちゃって……。けど、私は大丈夫だから」

呆れたような顔で見合う和哉と紗耶香。

23 道

聡実が、和哉の肩につかまりながら、歩いている。

聡実 「私一人でも帰れるのに……」

和哉 「ほっとけるわけないだろ」

聡実 「……」

和哉 「聡実、何か隠してるだろ……」

聡実 「(苦笑して)何を隠してるっていうの」

和哉 「……」

聡実 「本当に何もないから、大丈夫」

和哉 「なら……良いけど……」

聡実 「うん」

だが、不安そうに聡実を見ている和哉。

24 公園 (夜)

和哉が、ベンチで座って待っている。

と、自転車に乗った春樹がやってくる。

春樹 「和哉」

和哉 「悪いな、学校もバイトも忙しいのに」

春樹「良いよ良いよ。バイトは休日だけだから（と、自転車を降りる）」

和哉「そっか」

春樹「それより、話つて何？ 直接じゃないとダメなことだった？」

和哉「まあな」

春樹「……？」

和哉「聡実のことなんだけど……」

春樹「聡実の……？」

和哉「何か、変わった様子ない？」

春樹「俺に言われても……。聡実と同じ高校に行ってるのは和哉のほうでしょ。和哉のほうか、聡実のことよく知ってるじゃん」

和哉「そうじゃないんだ……」

春樹「どういうこと……？」

和哉「あいつ、俺に何か隠してる気がする」

春樹「何隠してるっていうの？」

和哉「それが分からないから、春樹に聞いてるんだよ」

春樹「真由子の退院祝いのおきも、特に大し

て変わった様子はなかったし、そのあとは、  
聡実と会ってないからね」

和哉「そっか……」

春樹「何か、ごめんね。力になれなかったみたいで……」

和哉「あ、良いよ別に。悪かったな、こんな  
ことと呼び出しちゃって」

微笑んで首を横に振る春樹。

## 25 牧家・和哉の部屋（夜）

ベッドで横になっている和哉。

× × ×

へフラツシユ

滝雀学園高校の玄関。

足に激痛が走り、慌てて靴を脱ぐ聡実。

× × ×

滝雀学園高校の保健室。

聡実「下に落ちてた画鋏に気がつかなくて、  
ふんじやったんです」

× × ×

帰り道。

聡実「本当に何もないから、大丈夫」

× × ×

フラッシュが続いたあと、

和哉「(呟いて)大丈夫かな、あいつ……」

難しい顔の和哉。

## 26 墓地

聡実が、永井家の墓に向かって手を合

わせている。

聡実「お姉ちゃん……。今頃になって、お姉

ちゃんの気持ちがあった気がする……。

誰にも言えないよね。お姉ちゃんも、今の

私みたいに、ずっと一人で苦しんでたんだ

ね……。ごめんね、お姉ちゃん……。また

愚痴言いに来るかもしれないけど、良い？

また来るね……」

と、去っていく。

## 27 滝雀学園高校・全景

28 同・廊下

聡実が登校してくる。

クラスメイトの香澄（17）と裕梨（17）が聡実の前に立ちふさがる。

うつむく聡実。

香澄、突然聡実の腕をつかみ、どこかへ連れて行く——伴っていく裕梨。

と、和哉も登校してくる——香澄たちに連れて行かれる聡実の後ろ姿を見かける。

難しい顔の和哉——鞆を持ったまま、ゆっくりと後をつけていく。

29 同・倉庫

裕梨が、マットに横たわっている聡実の手首を押さえて、香澄がモップの棒で聡実の体を殴っている。

聡実「痛いッ。やめてよッ」

香澄「あんた、最近私に反抗的だね。私に反

抗したらどうなるか知ってるくせに、バカな女なんだから」

裕梨「この間、私の電話も無視したよね。そのお仕置きもしないとね」

と、聡実の腕を足で踏む。

聡実「やめてーッ」

裕梨「だったら初めから、私たちの言うこと聞いてれば良いのよ。ちよつと成績が良いからって、調子に乗るからいけないんだよ。

自業自得」

聡実「私……調子になんか乗ってない……。ただ、分からないなら勉強を教えてあげようと思っ……」

香澄「それが嫌味なんだよ。そうやって、上から目線で私たちに勉強教えて、優越感に浸って、私たちのこと見下してたんでしょ」  
聡実「そんな風に思うからいけないんでしょ。被害妄想も良いところだよッ」

更に強く聡実を殴る香澄。

香澄「まだ懲りないみたいだね」

裕梨 「(香澄に) どうする？」

香澄、自分の鞆から筆箱を取りだして、  
カッターナイフを聡実に見せる。

怯えて首を横に振る聡実。

聡実 「いや……やめて……」

奇妙な笑みを浮かべる香澄。

と、香澄の背中に突然辞書が投げつけ  
られ、カッターナイフが落ちる。

香澄 「何するのよッ」

と、ドアのほうを振り向く——和哉が  
立っている。

香澄 「和哉……」

裕梨 「……」

聡実 「……」

和哉 「(香澄と裕梨に) お前ら、随分と残酷  
な事してるんだな」

香澄 「(裕梨に) 行くよ」

裕梨 「うん」

和哉 「逃げるのか？」

香澄 「ウザいんだけど」

和哉「ウザいと思うんなら思えば良いじゃねえか。俺より、お前たちのほうがよっぽどウザいと思うけどな」

睨み合う和哉と香澄。

裕梨「(香澄に)行こッ」

香澄「うん」

と、もう一度和哉を睨みつけると、裕梨と共に去っていく。

和哉「聡実、大丈夫か？」

聡実「うん……」

不安そうに、聡実を見つめる和哉。

### 30 公園 (夕方)

和哉がベンチに座り、聡実に問い詰めている。

和哉「いつからだ？」

聡実「……」

和哉「何が原因であんなことになったんだよ。どうしてずっと黙ってたんだ」

聡実「……」

和哉「おい、聡実……」

聡実「言えるわけないでしょ……」

和哉「……？」

聡実「和哉君に、私の気持ちなんて分かるわけないし、こんなこと、相談できるわけないじゃない」

和哉「……」

聡実「もし私が和哉君に相談したら、絶対和哉君は私を庇うでしょ。そうなったら、今度は和哉君がいじめられるよ。そうなったら、私……とてもじゃないけど、和哉君のことなんて守れない。守れず、見て見ぬ振りして、裏切ることになるんだもん……」

和哉「聡実……」

聡実「今になって、私、お姉ちゃんの気持ちが分かった気がする……」

和哉「……」

聡実「いじめられると、誰にも相談できずに、一人で抱え込んで、自ら命を絶つ選択肢しか残らなくなるんだよ」

和哉「聡実……。お前、まさか……」

聡実「何度死のうと思っただか分からない。いつも、あんな風に香澄たちにいじめられても、結局私は誰にもSOSのサインも出せずに、一人で悩みを抱え込むしかなかったの。だから、お姉ちゃんだって……」

和哉「聡実のお姉さんの葬儀、俺も行ったから、いじめを苦に自殺したとは聞いてたけど、そこまで残酷だったのか？」

聡実「学校に言っても何にもしてくれなかった、いじめを誰にも相談できずに抱えこむぐらいなら、自ら命を絶ちますって、遺書には書いてあった」

和哉「……」

聡実「お姉ちゃん、親友がいじめに遭って、それを庇ってからいじめられるようになったんだって。しかも、その親友ったら、見て見ぬふりしてたんだよ、お姉ちゃんがいじめられてるのを」

和哉「……」

聡実「自分は守ってもらったのに、その相手が同じ目に遭ってるときには守ろうともしなかった。それが一番悲しかったって……」

和哉「お姉さん、そんな苦労を一人で背負ってたのか」

聡実、すすり泣きを始めると、

聡実「私、死ぬ直前にお姉ちゃんと会話したの。ただ、『おやすみ』って。まさか、永遠にお休みになるとは思わなかったけどね。お姉ちゃんの遺体見たとき、信じられなかったもん」

和哉「そりやそうだろ。ついさっきまで、普通に会話してた人が、突然死ぬんだから」

聡実「それに、お姉ちゃんが亡くなってから、共働きだった両親はどうして異変気づいてやれなかったんだって、お互いに罪の擦り付け合いして離婚するし、父さんに引き取られて、父と娘二人で何とか助け合っただいこうと思ったら、不倫相手でもあった大

学時代の同級生と再婚しちゃうし……。私、最近何のために生きてるのか、分からなくなるの」

返す言葉もなく黙っている和哉。

聡実「（苦笑して）ごめん、こんな話しちゃって……。気分悪くしちゃったね……。じやあね」

と、帰ろうとする。

和哉「待てよッ」

振り返る聡実。

和哉「確かにお姉さんは、誰にも頼れず一人ぼっちで亡くなった。けど、聡実は本当に一人なのか？ いざとなったら、頼れる人なんかいくらだっているだろ。真由子だって、聡実に感謝して、真実ちゃんの名前にも聡実の字を使っただろ。聡実を頼りにしている人がいる分、お前だって誰かを頼りにしても良いんじゃないのか」

聡実「和哉君……」

和哉「聡実は、一人じゃない。そのことだけ

は忘れるなよ」

和哉の顔をじっと見つめている聡実。

31 アパート・谷島家・居間（夜）

コンビニの袋を持った春樹、利枝子、  
亮が入ってくる。

春樹「悪かったね。俺の帰り、わざわざ待つ  
てくれて」

亮「良いよ良いよ、どうせ俺は暇してるんだ  
から」

利枝子「私も、今日はテニスのコーチが休み  
だったから、時間空いてたし」

と、袋から弁当を取り出す春樹、利枝  
子、亮。

春樹「いただきます」

利枝子・亮「いただきます」

と、弁当を食べ始める。

春樹「けど、何も一緒にコンビニの弁当買わ  
なくなつて。利枝子だって、早く帰らない  
と、帰り道危ないし、お母さん心配するん

じゃないの？」

利枝子「私の母親が心配してるのは、店の売上だけ。私が何時に帰ってこようが心配なんてしないよ。店の売上さえ良ければそれで良いみたいな顔してるから」

春樹「そっかぁ。(と亮に) 亮君もまだ大丈夫なの？」

亮「我が家はね、今はみんな深雪のことで一杯なんだよ。俺が、高校の第一志望に落ちたから、今度は深雪に賭けてるんだよ。特にうちは、会計事務所やってるせいとか、母親が世間体気にしてるから、少しでも良く見せたいんだろうな。馬鹿馬鹿しい。事務所が大事なのか、娘の受験が大事なのか、分からないんだよ。本当に大事に思うのは、普通に考えて、家族だろ」

春樹「けど、世間体を気にする亮君のお母さんの気持ち、何となく分かる気がする。だからって、変に亮君が気にすることないでしょ。第一志望落ちても、俺たちと同じ学

校だから、おかげで楽しいし。これで良かったんだよ。(と利枝子に)ねえ、利枝子もそう思うでしょ？」

利枝子「そうだよ。そんな一年半近くも前のことだもん。未だに引きずるようなこと、しないでしょ」

亮「それがな、最近うちの母親は、二言目に『お兄ちゃんはダメだったから』って深雪に言うんだよ。そんなの、深雪にとってはただのプレッシャーにしかないだろう。俺は俺、深雪は深雪なんだから。そんな気持ちも分からずに言うんだからなあ……。深雪だって可哀想だよ」

春樹「妹思いなんだね、亮君は」

亮「当たり前だろ、唯一の大事な妹なんだから。たった一人の兄弟、大事にしてやるのは当然だろ」

春樹「深雪ちゃんが羨ましいよ。こんな良いお兄ちゃん持って。俺も、姉ちゃんにこんな風に言われてみたいよ」

お互いの顔を見合う利枝子と亮。

利枝子「春樹、最近お姉さんと上手くいってないの？」

亮「たった一人の家族じゃないか」

春樹「まあ、それはそうなんだけどね……。俺もね、みんなの前では言わないけど、いろいろあって（と苦笑する）」

利枝子「春樹もなんだかんだで、家庭の問題抱えてるんだ」

春樹「まあね。そういえば、話戻るけど、深雪ちゃんは結局、前に亮君が受験したあの進学校受けるの？」

亮「そうらしいぞ。まあ、俺は見事にスベって、自分には勉強の才能がないことが分かったけどね」

春樹「けど良かったんだよ、これで。亮君が同じ高校で良かった。小学校や中学校から一緒に友達は他にもいるけど、やっぱり亮君がいないと、物足りない感じがするから。自分の成績がスベったことなんて、気にす

ることないんだから」

利枝子「そうだよ。亮君がいるから、今のクラスだって、良い雰囲気になってるんだよ。亮君が受験に失敗したことは、ある意味良かったのかもよ」

亮「そうかもな。俺だって、好きで受験したわけでも、何か目標があつたわけでもないんだ。ただ、親の言いなりになって受験しただけだったからな。やっぱり、通学の負担も少なくて、春樹や利枝子と一緒に学校のほうが良かったんだよな」

利枝子「そうそう」

春樹「深雪ちゃん、無事に受験合格できると良いね。もうすぐ夏休み始まるけど、受験生にとっては、夏休みも大事だし、年末年始も大事だから、これから深雪ちゃん大変かもしれないけど、受験して親の期待に添えるんだったら、頑張るしかないよね。亮君もこれから大変なわけだ」

苦笑している亮。

32 藤原会計事務所・表（夜）

亮の家で、一階が事務室、二階が母屋のプレハブ住宅である。

亮が帰宅する——事務室の電気がついているのを見て、いぶかしそうな顔をする。

33 同・事務室

亮の父・宣彦（48）が、一人パソコンに向かって仕事をしている。

亮、入る。

宣彦「（亮を見て）おお、帰ってたのか」

亮「ただいま」

宣彦「母さん、愚痴ってたぞ。亮はまだ帰ってこないのか、メール送っても返信来ないって」

亮「そうか……」

宣彦「深雪のことで、カリカリしてるのは分かるけど、俺に当たるなんていい迷惑だ。

仕事に差し障るからな。本当にいい加減してもらいたいよ。こっちは、いくら小さい会計事務所だって、数人の社員抱えながら、やってるんだよ。俺の気持ちも、少しは分かってもらいたいよ」

亮、無言のまま母屋に行こうとする。

宣彦「亮。父さん、まだお前のこと諦めたわけじゃないからな」

亮「……」

宣彦「ここは、やっぱり長男であるお前に継いでほしいんだ。今からだって、勉強すれば大学に行けるだろう。また、考えといってくれよ」

複雑な顔の亮である。

#### 34 藤原家・玄関

亮、入る。

亮「ただいま」

亮の妹・深雪（15）が、自室から出てきて、

深雪「お帰り。てっきり、今日は帰ってこないのかと思った」

亮「どうして？」

深雪「だって、母さんがそう言うんだもん」

亮「母さん？」

と、居間から亮の母・佐和（46）がそそくさと出てくると、

佐和「やっと帰ってきたわ。メールしても返信来ないし、どこかで泊まってくるのかと思っただのよ」

深雪「（亮に）ほらね」

亮「（佐和に）泊まるときは、ちゃんと連絡するよ。それがなかったら、どんなに遅くなっても帰ってくるんだから、心配しないでくれよな」

と、居間に向かう。

後を追っていく佐和と深雪。

35 同・居間

亮、佐和、深雪、入る。

佐和「だったら、ちゃんとメール送ってくれれば良いでしょ。余計な心配、私にさせるなんて。私はね、亮のことが心配だから言ってるのよ」

うんざりしたような顔をする亮。

深雪「（佐和に）そんなにガミガミ言ったらお兄ちゃん可哀想だよ。ちゃんと帰ってきただし、そんな目くじら立てることないじゃん」

佐和「そんなこと言ってる場合じゃないですよ」

亮「本当に、俺のことを心配してるのか？」

佐和「亮……」

亮「こんなささいなことで、何も神経すり減らすことなんてないんだよ。しかも、今では俺が受験失敗したからって、今度は深雪に押し付けるようなことして……。今に深雪も失敗するぞ。何も受験することが目的じゃないんだから。受験して、ハイレベルな高校に入ったって、学校生活が上手くい

かなかったら、何の意味もないんだから。  
それなら、自分の成績にあって、環境の合  
うところに行けば良いんだ。分相応ってや  
つだよ」

佐和「（ヒステリックに）なんてこと言うの  
よ。母さんはね、あんたたちのことを心配  
して……」

亮「もう聞き飽きたよ、その台詞は……。大  
して心配もしてなくせに、そんな風に言  
われても迷惑だよ。風呂入ってくる」

と、荒々しく出ていく。

佐和「あんな言い方しなくても良いじゃない」  
深雪「……」

佐和「深雪、あんただけはお兄ちゃんみたい  
にならないでよ。お父さんは、お兄ちゃん  
のことまだ当てにしているみたいけど、お  
母さんはもう諦めてる。深雪だけが頼りな  
んだからね」

苦笑して、頷く深雪。

36 中央高校・二年A組教室（数日後・夕）

新聞部の原稿を見ている春樹が、利枝子と亮と話している。

利枝子「来月、体験入学あるんだってね？」

春樹「そうだね。新聞部にも、何人か中学生が来るようなこと聞いたけど」

亮「俺たちも、そんな頃があったんだよな。

あの時は、ただ春樹の付き添いで来たようなもんだったけど、まさかその高校に入るとは思わなかったけどな」

春樹「またその話（と苦笑する）」

亮「いや、そういうわけじゃないけどさ、中学生の話になると、嫌でも思い出しちゃうから」

春樹「深雪ちゃん、受験勉強頑張ってるんでしょ。いずれは、会計事務所継ぐつもりで」  
亮「どうだろうな。父親は、まだ俺のこと諦めてないみたいだけど」

春樹「当てにされてるんだもん、良いことじゃない。何か目標があれば、亮君だって深雪

ちゃんだって頑張れるでしょ。体験入学に来る中学生だって、目標があるから来るんだもんね。羨ましいよ。俺なんて、自分が何したいのか分からなくなるもん」

利枝子「……」

亮「お前は、新聞部で頑張ってるじゃないか」  
春樹「けど、それは学校内での活動でしょ。

将来性があるわけじゃないから、何を目標にして、これから高校生活送っていけば良いんだろうって思うんだよね。この高校に入ったのだって、通学の負担が少なくて、なおかつ公立高校だから授業料も掛からないっていうそれだけの理由だもん。バイトだって、ただ家計を支えるっていう理由だけだし……。そう考えると、浩輔は働きたいけど勉強もしたいからって、ここの定時制に通ってるし、真由子だって真実ちゃんの子育てっていう生きがいを持って。和哉と聡実も大学進学に向けて日々頑張ってるし、倫子だって俺と同じ環境で育つ

たとは思えないぐらいなんだから。たまに倫子の家に行くだけで、俺と倫子では、もう住む世界が違うんだろうなって思うんだよ。みんな、それぞれに目標があったり、生きがいがあったりして羨ましい……」

利枝子「……」

亮「……」

春樹「俺も、目標見つけないとね……」

利枝子「私だって目標なんてないよ」

亮「俺だってそうだよ。親が期待してるからって、何もそれに答える必要なんてないんだから。俺は、会計事務所継ぐつもりないから」

利枝子「私だって、あんなスナック継ぐつもりないよ。(と春樹に) 春樹は考えすぎなんだよ。将来が見えないのは、私たちも一緒。気にすることないの」

春樹「……」

利枝子「人生、まだまだこれからなんだから」

やっと笑顔になっている春樹。

37 滝雀学園高校・二年二組教室

和哉が、荷物をまとめて帰ろうとして  
いる。

紗耶香が入ってくる。

紗耶香「良かった、まだ帰ってなかったんだ」

和哉「何だ、紗耶香か」

紗耶香「聡実から聞いた。助けたんだってね、  
香澄たちからいじめられてるところを」

和哉「ああ」

と、香澄が入ってこようとするが、和  
哉たちがいることに気付くと、ドアの  
前で立ち止まる——会話を盗み聞きし  
ている。

紗耶香「ずいぶん、かつこ良いことしてるじ  
ゃん」

和哉「俺は、ただ聡実を助けたい一心で」

紗耶香「すごいね、和哉は……。私、そうい  
う男に憧れるよ」

和哉「どういうことだ？」

紗耶香「和哉は、今好きな人いるの？」

和哉「いるように見えるか？」

紗耶香「じゃあ……いないの？」

和哉「そういうことだな」

紗耶香「……」

和哉「紗耶香……？」

紗耶香「私……和哉のことが、好き……」

和哉「紗耶香……」

香澄「！」

紗耶香「やつと言えた……。ずっと言おうか  
迷ってたんだよ」

難しい顔の和哉。

紗耶香「ごめん。急にこんなこと言われて、  
びつくりしたよね」

和哉「紗耶香……」

紗耶香「何……？」

和哉「ごめん……」

紗耶香「和哉……」

和哉「紗耶香の気持ちは嬉しいけど、自分の  
ことで精いっぱいだから、紗耶香のことを

考える余裕がないんだ……」

奇妙な笑みを浮かべる香澄。

紗耶香「そっか……」

和哉「本当に、ごめん……」

紗耶香「良いの……私の気持ちさえ、和哉に  
伝えれば、それで十分だから……」

黙ってしまおう和哉。

寂しそうな顔の紗耶香。

### 38 同・駐輪場

裕梨が、柱にもたれて立っている――

香澄がやってくる。

香澄「ごめん、遅くなって。忘れ物、やっぱ  
り良いや。別に急ぐことじゃないし」

裕梨「本当に良いの？」

香澄「うん。その代わりにね、すごいこと聞  
いちゃった」

裕梨「何？」

香澄、裕梨の耳に何かを囁く。

裕梨「え……それ本当なの？」

香澄「この耳で確かに聞いたから、間違いない」

裕梨「けど、どうして紗耶香が……」

香澄「聡実を助けたかららしいよ。女の子を助けた和哉の行動に、惹きつけられたんじゃない？」

裕梨「なるほどねえ」

香澄「これから、どうなるかな。和哉と紗耶香」

裕梨「気まずい関係にはなると思うな」

冷めたような顔の香澄。

### 39 道

学校帰りの聡実が、ぼんやりと歩いている。

と、利枝子の声が聞こえる。

利枝子「聡実ッ」

振り返る聡実。

利枝子がやってくる。

聡実「利枝子、今帰り？」

利枝子「うん。聡実も？」

聡実「うん」

利枝子「ねえ、久しぶりに、うち寄ってかない？」

聡実「良いの？」

利枝子「もちろんッ」

#### 40 山岸家・利枝子の部屋

利枝子と聡実が、中学校のアルバムを見ながら談笑している。

聡実「懐かしいね、こうやってみると。このときが一番楽しかったかもね。（と亮の写真を見ると）ほら、亮君なんて全然変わってない」

利枝子「本当だ。（と春樹の写真を見ると）それだったら、春樹だって」

聡実「こうやって見ると、私たちって全然変わらなないけど、何だか寂しい気もするね。前までは、毎日のように顔を合わせてたメンバーなのに」

利枝子「そうかもしれないね。私たち、高校が離れ離れになって、物足りなさ感じてたから」

聡実「私も……」

利枝子「今の生活に満足してないわけじゃないんだけど、春樹と亮君だけじゃ、何か寂しいんだよね。別に他の友達が嫌ってわけじゃないの。ただ、春樹と亮君と和哉って、小学校から一緒だったって聞くし、そこに、私たちと同じ小学校だった浩輔が加わってたでしょ。私と真由子と聡実だって、浩輔を通じて、春樹たちや春樹と同じ施設で育った倫子と友達になって、自然とみんなと仲良くなったでしょ。やっぱりあの八人は最高だなんて、今でも思うの」

聡実「確かに……みんな面白くて楽しくて優しかったもんね」

利枝子「和哉君は、相変わらず？」

聡実「うん。優しい性格は変わってないよ。ただ、ちよつと優しい気持ちが強くなった

かな」

利枝子「そうなの？」

聡実「うん」

利枝子「中には変わった子もいるかもしれないけど、私たちは変わってないね。変わらな  
ないのが一番だもんね」

聡実「うん……」

利枝子「そういえばさ、聡実って、今好きな  
人とかいるの？」

聡実「えッ……急に何？」

利枝子「進学校だもん、彼氏なんて作る余裕  
ないか。(と笑うと) 聡実の学校、とても  
そんな恋愛で青春してるイメージないも  
ん」

聡実「いや、そうでもないよ。付き合ってる  
カップルなんて、結構いるし」

利枝子「そうなの？」

聡実「うん。利枝子はどうなの？」

利枝子「私かあ……。欲しいんだけど、いな  
いんだよねえ。理想の人が身近にいないか

らさ」

聡実「私は……」

利枝子「聡実？」

聡実「いるよ、好きな人」

利枝子「えッ……？ 誰？ 同じ学校の子？」

聡実「それは言わない」

利枝子「良いじゃん、教えてよ」

聡実「だって、まだ告白してないもん」

利枝子「ひよつとして片思いなの？ 良いな

あ、そういうの。青春って感じじゃん」

聡実「諦めてるけどね。どうせ、私みたいな

女を好きになる男の人なんていないだろ

うし。片思いで良いと思ってる」

利枝子「告っちゃいなよ。自分の気持ちに整

理もつくし、相手の気持ちだって確認でき

るんだよ」

聡実「また今度メールするよ」

利枝子「メールじゃダメだよ。こういうこと

は、ちゃんと面と向かって言わないと。文

字よりも、自分の言葉でちゃんと伝えたほ

うが、相手にも気持ちは届くんじやないかな」

聡実「そう……だよな」

利枝子「まあ、私が偉そうに言えた立場じゃないけどな。(と苦笑すると)とうとう聡実も、そういう気持ちになったんだ。生徒会長まで務めた真面目な聡実も、やっぱり女の子なんだね。けど、聡実だったら純粋な恋愛になりそう。ピュアな恋愛になるよ、きっと。私、応援するから」

聡実「うん……ありがとう……」

一人はしゃいでいる利枝子。

しかし、聡実は難しそうな顔をしている。

つづく